

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580052

研究課題名(和文) 都鄙観念から考える日本文学史、日本文化史の研究

研究課題名(英文) the study of Japanese literature and cultural history through analyzing the concept of tohi that the capital is more prestigious than other areas

研究代表者

佐倉 由泰 (sakura, yoshiyasu)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：70215680

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の都鄙観念のしくみと史的展開を考究することで、日本の文学史、文化史の本質を捉える新たな視点を確立することをめざしたものである。古代から近世前期に至る文学テキストの記述を調査し検討することによって、日本の都鄙観念について、(A)その基本的なしくみ、(B)その史的展開、(C)この観念をめぐって浮かび上がる文学史、文化史にかかわる重要な課題を明らかにして、所期の目的を達成することができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to gain a new perspective for understanding Japanese literature and cultural history through analyzing the concept of tohi ('capital and country'), a belief that the capital is more prestigious than other areas. Through a investigation of various descriptions of tohi throughout Japanese literature from the Heian to early Edo period, I was able to clarify the fundamental mechanisms and historical change of this concept and at the same time draw a vivid picture of Japanese literature and cultural history arising from the concept of tohi.

研究分野：日本文学

キーワード：都鄙観念 日本文学史 日本文化史 リテラシー史 学芸 日本式の漢学(吏の漢学、類書の漢学)
仮名の歌文のリテラシー 博士の漢学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者である佐倉由泰が、同じく研究代表者を務めた基盤研究(C)「古代から中世に至る真名表記テキストに関する表現と知の系脈についての研究」(研究課題番号: 21520176、研究期間: 2009年度～2012年度。研究分担者なし)の成果を中心に、自身のこれまでのさまざまな研究を統合し、新たに都鄙観念を考究することで、日本の文学史、文化史を捉え直す基盤を構築しようと試みたものである。都鄙観念とは、空間を都と鄙とに分節し、都を中心と、鄙を周縁と意味づける観念であるが、この認識が古代以来、近代に至るまで、日本の文学、文化のあり方に深く関与してきた。本研究の問題意識の中心は、こうした都鄙観念のしくみと力学を考究することにある。

空間を都と鄙(あるいは、みやびとひなび)とに区分するこの観念は、一見ありふれた単純なもののようにだが、発現の実態は複雑であり、影響力も甚大である。それにもかかわらず、都鄙観念は、重要な問題として注目されずに等閑視されてきた。そもそも、都という概念と鄙という概念とが同時に出現するという基本的なしくみにも注意が払われてはいない。都は、外在する鄙が確定されて初めて囲い込まれた内部として存立する。鄙なくして都はない。都と鄙は、対立概念である前に、相補概念であり、鄙の存在を通して都の意味は現前する。そのメカニズムを明確に提示して、文学史上、文化史上の重要な問題として論じている先行研究を見出すことはかなわない。都鄙観念と他の文学的、文化的観念との関係を捉えることの重要性についても看過されてきた。

また、都 = 「みやび」の場、鄙 = 「ひなび」の場という二項対立が簡単に揺らぐことさえ見逃されている。都には、「みやび」とは決して呼べないような、喧騒に満ち溢れた祝祭的な場が出現する。それは、11世紀に藤原明衡が著したとされる『新猿楽記』を読むだけで一目瞭然である。「都」とはいかなる場であるかという規定すら危ういのだ。しかも「都」という場の問題はそれにとどまらない。中世になると、京という中心に加え、鄙の中から鎌倉という新たな中心的磁場が出現する。もはや円論理では理解できなくなる。二つの中心を持つ以上、それは楕円の論理によって捉える必要がある。日本の中世文化の理解には、この京と鎌倉との関係だけではなく、広く楕円のビジョンを適用する必要がある。こうした楕円の思考については、批評家の花田清輝に、「楕円幻想 ヴィヨン」(『文化組織』第4巻第6号、1943年10月。『復興期の精神』我観社、1946年10月等に再録)という、示唆に富む秀逸な考究がある。が、この考究も文学史研究、文化史研究の場で重視されることはなかった。わずかに、私、佐倉が、「『平家物語』における祝祭的表象」(鈴木則郎編『平家物語 伝統の受容と

再創造』おうふう、2011年5月所収)という論考において、花田の考究を受け止めつつ、『平家物語』の都鄙観念に注目し、そこに、楕円の思考(相反する指向を持つ複数の価値観を同時に含み込んだ思考)にもとづくしたたかな記述が見られることを指摘した。しかし、それでも、『平家物語』の都鄙観念の動態を十分に理解したとは言えない。その上、鎌倉時代から室町時代に至る社会の推移の中で、政治上、文化上の中心の複数化はさらに進行する。従来、この中心の複数化という問題と、都鄙観念の問題とを関連づける考究もなされてこなかった。この二つの問題に注目して、日本の中世の文学、文化を総合的に捉えることは、すべて今後の課題と言わざるを得ない。

以上のような研究の状況と意義を鑑みる中で、本研究を構想するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の都鄙観念のしくみと史的展開を考究することを通して、日本の文学史、文化史を捉え直す新たな視点を確立することにある。この目的に即して、2013年度～2015年度の三年間の研究期間に、古代から近世前期に至る多くの文学テキストの記述を調査し検討することによって、日本の都鄙観念について、(A)その基本的なしくみ、(B)その史的展開、(C)この観念をめぐって浮かび上がる文学史、文化史にかかわる重要な課題を明らかにすることに努めた。

こうした目的の設定に際して特に注目したのが、空間的分節に伴う差異化と、差異を乗り越える普遍化という、二つの相反する方向を持つ文化上の志向である。差異化の志向は、都鄙観念の強化をもたらし、普遍化の志向とは、空間的分節の脱領域化、グローバル化に外ならない。

本研究が考究の背景とした上記の基盤研究(C)「古代から中世に至る真名表記テキストに関する表現と知の系脈についての研究」の成果の一つに、佐倉の論文「リテラシーの動態を捉える文学史は可能か」(『文学・語学』第200号、2011年7月)がある。これは、吏の漢学とも称すべき日本式の漢文のリテラシーの系脈が、仮名の歌文のリテラシー、博士の漢学(漢籍から正格の漢文を学ぶ漢学)と並ぶ、リテラシーの三つの柱の一つとして、日本の文化、学問を支えてきたことを明らかにしたものであるが、仮名の歌文のリテラシーと博士の漢学が主に都鄙観念を支え、強化したのに対し、日本式の漢学は、都と鄙の差異を超えた知のグローバル化を推し進める役割を果たしてきたと考えられる。

従来の日本の文学史、文化史の研究においては、仮名の歌文のリテラシーと博士の漢学を支えられたテキストに注目が集まり、日本式の漢学にもとづく、平安時代の『将門記』、『尾張国郡司百姓等解文』、『仲文章』、『新猿

楽記』、『雲州（明衡）往来』、中世の『平家物語』の真名本の四部合戦状本や『源平闘諍録』、真名本『曾我物語』、『大塔物語』、『桂川地蔵記』、『文正記』等の真名表記テキストは等閑視されてきた。

本研究は、このような従来の評価軸や価値観を離れ、仮名の歌文のリテラシー、博士の漢学と、新たに注目した日本式の漢文という三つの知の系脈について、その相互の関係を幅広く捉えてこそ、日本の文学史、文化史の本質が解明できるという観点に立って、調査、考察を進めることとした。日本の文学史、文化史を根源的に捉え直す上で、それが不可欠のことと考えたのである。

3. 研究の方法

本研究は、上述の、日本の都鄙観念について、(A)その基本的なしくみ、(B)その史的展開、(C)この観念をめぐる浮かび上がる文学史、文化史にかかわる重要な課題を明らかにするために、年度ごとに、次のような方法にもとづいて考察を進める計画を立てた。

初年度の2013年度には、課題(A)を強く意識して、主に日本の都鄙観念の基本的なしくみについて考察を進めることとした。平安時代の作品を中心に文学テキストの記述を幅広く調査し、検討する中で、仮名の歌文のリテラシー、博士の漢学、日本式の漢学のそれぞれの特質と相互の関係を考究し、空間を都と鄙とに分節するしくみと、そのしくみが創出する文化の動態を捉えることに努めた。また、上記のような文献調査に加えて、地域の文化財、文化施設での実地調査を行うことで、地域の境界と文化的アイデンティティーの形成に関する知見を深め、空間的分節をめぐる文化的意味を深く理解しようと試みた。

続く2014年度には、2013年度の考究を踏まえて、課題(B)の都鄙観念の史的展開の解明に主に取り組むこととした。鎌倉時代から室町時代の文学テキストを中心に多くの文献を調査することを通して、中心の複数化が進行した中世の文化の中で、都鄙観念がどのように機能したのかという実態について理解を深めようと考えた。また、2013年度に引き続き、この2014年度も、文化財、文化施設での実地調査を積極的に行うことで、空間的分節をめぐる文化の動態とその意味を深く掘り下げて捉えることに努めた。

最終年度の2015年度は、(B)の課題について、都鄙観念の史的展開を総合的に捉えることを意図した。室町時代後期から近世前期に至る文学テキストを中心に、引き続き多くの文献を調査することを通して、日本の都鄙観念の動態を幅広く展望しようと考えた。また、課題(A)、(B)についての考察にもとづいて、(C)の課題に取り組み、日本の文学史、文化史を新たに展望する基盤を構築するために、都鄙観念をめぐる検討すべき重要な課題の整理に努めた。

加えて、本研究には、2016年度以降に、多

くの研究分担者とともに推進すべき大規模な総合研究の基盤作りを行うという意味もある。そうした基盤作りを可能な限り自在に柔軟に幅広く進める必要があることから、本研究は、研究代表者である佐倉一名のみによって実施することとした。

4. 研究成果

本研究は、上記の方法に則って、計画のとおり調査、考察を進めることによって、所期の目的を達成することができた。

課題(A)の、日本の都鄙観念の基本的なしくみの解明については、まず、「都」なるものの多様な様相、動態を見出した。都が、「みやび」の場であると同時に、喧騒に満ちた祝祭的な時と場を含み込むことはもとより、空間的分節を推し進める中心として機能しつつも、空間的分節を乗り越える普遍性の根源としての役割を担うことも明らかになった。都は、空間を分節し、差異化する中心であるとともに、地域と地域を差異を超えて統合する動力の根源ともなり得るのである。こうした都の多様性に対応して、境界や地域の文化的意味も揺れ動き、幅広い多様性を呈することも捉えることができた。

このように、都と鄙との関係がスタティックな二項対立では捉えられないことの実態が明らかになったことで、課題(B)の、日本の都鄙観念の史的展開を捉えることについても、その理解を大きく深めることが可能になった。たとえば、中世における中心の複数化の中で、京都が中心としての機能を弱めながらも、和歌、連歌、物語（お伽草子を含む）等の生成や受容において、普遍的な理念の根源としてその存在感を高めていることについても、明確な説明と本質的な議論を行うことができるようになった。また、都と鄙の差異を無化する知のグローバル化において、都を普遍性の根源とするグローバル化と、都鄙観念に囚われずに世界の普遍性に繋がるようにグローバル化があったことも明らかになった。前者を主に支えたのが仮名の歌文のリテラシーであり、後者を支えたのが日本式の漢学である。

そして、このような考察を通して、都鄙観念の束縛から比較的自由である日本式の漢学が、喧騒に満ちた祝祭の場の描写を通して世界を表象することと、地域の切実な実情の記述を通して固有の事件、環境を表現することを、ともに実現できたことと理由と意義も本格的に論じて行けるようになった。日本式の漢学は、史の漢学、あるいは、類書の漢学として、職能と生活を重んじ、職能に生きる人々の姿を記すことに長けており、それによって、世界の表象や固有の地域の社会環境の表現が可能になり、古代、中世の日本の知の編成を主導する役割さえも担うことになったのである。ただし、日本式の漢学の担い手が多く男に偏っていたことには注意を要する。このリテラシーは、地域の違いを乗り越

え、幅広い階層に浸透したが、広範に女の担い手を得るには至らなかった。男女の違いを超えて広がったのは、仮名の歌文のリテラシーであった。そこに、仮名の歌文による学芸の重要な文化史的意味がある。

このように、本研究によって、相異なるリテラシーの特質と相互の関係が明らかになったが、これは、課題(A)、(B)についての成果であるとともに、(C)の、日本の文学史、文化史を捉え直すための問題の整理という課題にかかわる重要な成果でもある。日本の都鄙観念を考察する本研究の実践を通して発見的に理解できたのは、日本の文学史、文化史の本質は日本のリテラシー史を捉えることで明らかになるということである。それは、日本文化における学芸の意義や役割を根源的に問うための基盤を確保したことも意味する。

後述する5編の雑誌論文と1件の研究発表は、上記のような本研究の重要な成果であるが、課題(C)について、日本のリテラシー史の構築という新たな研究課題を発見するに至ったことの意義もきわめて大きい。現在、研究領域提案型の新学術領域研究の計画研究として申請を行うべく、この新たな研究課題に取り組むに至っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

佐倉由泰、職能の時代の中の藤原頼通の文化世界、和田律子・久下裕利編『考えるシリーズ 知の挑発 平安後期 頼通文化世界を考える 成熟の行方』、査読無(依頼論文)、武蔵野書院、2016(校正中。7月刊行予定)、頁未定(当該論文の予定総頁、26頁)

佐倉由泰、文学史、文化史の中の『大塔物語』、日下力監修、鈴木彰・三澤裕子編『いくさと物語の中世』、査読無(依頼論文)、汲古書院、2015、pp.289-312

佐倉由泰、境界としての「北」、接点としての「北」、全国大学国語国文学会編『文学・語学』、査読無(依頼論文)、第212号、2015、pp.38-48

佐倉由泰、軍記物語の表現史を構想するために 真名表記テキストに着目して、『文学 隔月刊』(岩波書店)、査読無(依頼論文)、第16巻第2号、2015、pp.70-87

佐倉由泰、真名表記が可能にしたもの『桂川地蔵記』の考察を起点として、『日本文学』、査読無(依頼論文)、第63巻第7号、2014、pp.45-57

[学会発表](計1件)

佐倉由泰、平安時代の漢詩文のなかの武官軍記物語への連関に着目して、日本文芸研究会 平成27年度第1回研究発表会、2015年9月12日、東北大学(宮城県仙台市)

[図書](計0件)

[産業財産権]
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐倉 由泰 (SAKURA, Yoshiyasu)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：70215680

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：